校長室から 平成３１年１月１８日

阪神淡路大震災から２４年
「しあわせ運べるように」

１９９５年，１月１７日，午前５時４６分，未曾有の大災害が日本を襲いました。阪神淡路大震災です。この災害で６４３４人の尊い人命が失われました。兵庫県・淡路島北部が震源で，戦後初めての大都市直下型地震であり，神戸市などで震度７が初めて適用になりました。約２５万棟の住宅が全半壊しました。まだ人々が動き出す夜明け前であり，古い木造住宅に被害が集中し，地震そのもので「直接死」した人の約８割が建物や家具の下敷きになったと言われています。

当時，私は，朝，テレビで映し出される状況を，「これはどこの国？」と寝ぼけ眼で，呆然と見ていました。「え，神戸，まさか・・・。」という感じでした。高速道路の高架橋が倒壊されている状況，ビルが倒壊している状況，あちこちで火災が起きている状況，凄まじい状況が次々と報道され続けました。そして，それまで日本ではあまり注目されなかった「ボランティア」という言葉，そして行動自体がとても重要なものとして捉えられるようになりました。この年は，１年間で延べ約１４０万人の方がボランティアとして阪神地方で活動しました。そして，この年は，ボランティア元年と呼ばれるようになりました。

この震災を教訓に様々な制度設計も進みました。住宅補修に関する法律，がれき処理に対する制度，被災者の生活再建支援，ＮＰＯの活動推進，自衛隊の方々の避難救助に関する制度等が次々と整えられていきました。そして，日本中の学校では，保護者，地域の方々と協力し，今では，当たり前のようになった地域防災訓練や募金活動を実施するようになりました。その中で中学生の役割も見直されるようになり，１９９５年は，日本にとって重要な年として記憶され，位置付けられるようになりました。

私は，４年前，神戸の防災教育研究大会に参加してきました。その時の小人数でのグループ討議で，一人の若者が話した事がとても印象的でした。「僕は，阪神淡路大震災の時は，まだ幼く，避難所で不安な気持ちで生活していました。そのとき，一人の女性の先生が，僕を優しく抱きしめてくれて，いつかきっと笑顔になれるから，一緒に進もうね。」と語りかけてくれて，自分が食べるおにぎりを渡してくれたそうです。「その時，僕は先生のように強く，優しい人になりたい。」と思い，中学校の教師になって，その思いを受け継いでいるそうです。グループ討議の場には，その女性の先生も参加していました。しかし，ご本人はその時の事は記憶がないそうです。きっと，避難所支援活動という困難に必死に向き合っている場面で，自然と発せられた言葉と行動だったのでしょう。

神戸では，震災直後に「しあわせ運べるように」という復興ソングが生まれました。当時，神戸市灘区で小学校教諭だった臼井真先生が，震災から２週間後，身を寄せていた親戚宅で生まれ育った街の変わり果てた姿をニュースで知り，衝撃を受け，わずかな時間で作詞・作曲したそうです。この歌はその後，被災地等で歌い継がれ，東日本大震災でも仙台市の中学生が，避難所で地域の方々に，「神戸」を「ふるさと」に読み替えて，披露しました。皆さんは知っていますか。

「　地震にも負けない　強い心を持って　亡くなった方々の分も　毎日を大切に生きていこう
傷ついた神戸（ふるさと）を　もとの姿に戻そう　支え合う心と　明日への希望を胸に　」

今や，日本中で歌い継がれるこの曲が，忘れ去られるくらい災害のない世界を祈りたいですね。